

辻 潤

「個」に生きる

高木

護

たいまつ 57



著者紹介

高木 護 (たかき・まもる)

熊本県にうまれる。14歳から働きはじめる。

昭和21年の夏、リオ群島レムパン島より復員。

放浪する。「辻潤著作集」(全6巻・別冊年

譜)を編集。著書に「おろかな人間」「人間

浮浪考」「落伍人間塾」「人夫考」(未来社)

「川蟬」「夕焼け」「高木護詩集」など。

現住所 東京都大田区石川町1-8-2

石川町住宅2-101

電話03-726-1088

ソリヤ CAT 941029 29

辻 潤 「個」に生きる

たいまつ新書 57 (青)

1979年6月10日 第1刷発行

定価 680円

554

著 者© 高 木 護

発 行 者 大 野 進

発 行 所 株式会社 たいまつ社

〒160 東京都新宿区百人町1-23-14

電話 03-363-3649

振替 東京 4-24362

印刷 厚 徳 社

<落丁・乱丁本はおとりかえします> 直接注文の場合、送料当社負担

だいまつ新書57

辻 潤 「個」に生きる

高木 護

だいまつ社

辻潤―「個」に生きる 目次

まえがき 4

辻潤とは： 7

穴キスト辻潤の本はあんたに合うかどうかと、南陽堂がいった。

密造酒を呑みながら、辻潤を語って喧嘩別れをした。

死にそくなって、「絶望の書」のゼツボウと出発した。

ダム工事の下請け飯場でツジジュンとなのつてみた。

人夫宿で「自我経」を唱え、辻潤に一步近づいた。

「天才論」が出版されるまで――辻潤素描 49

英語を苦学して、尺八を吹いた。

辻先生、お酒のお店に連れて行って――と生徒がいった。

辻潤と伊藤野枝は先生と生徒という、垣根を越えた。

小田原の我乱洞さんいわく、辻潤はシソーカではないよ。

辻潤は「天才論」を訳して、暮らしにこまった。

辻潤の日日・

87

「英語尺八ヴァイオリン教授」の看板を下げ、鴨クンを待った。

警官の前に立ち塞り、ケノケノケノ　と笑った。

ウワバミのおきよさんが辻潤との出逢いを語った。

辻潤は洋行したのですが、ケチケチのケチでした。

天狗になって空を飛びそこない、脳病院に入院した。

辻潤の放浪

125

辻潤の酒乱よりも、嵐のおみやげにへいこうした。

先生をお見舞いに行ったら、やらせろ、

金を持っていたら置いていけといわれた。

辻潤は風に吹かれ舞う木の葉っぱのように入ってきた。

ついに辻潤は餓死した。

辻潤年譜

155

あとがき

193

表紙絵 竹久不二彦

まえがき

辻潤つじしゅんとは何かといわれても、判りませんとこたえるしかない。いまごろ辻潤をひねくつてみたところで、わたしのちからでは一つの意味も見出せないかもしれない。しょうじきなところ彼を識りたければ、著書を読めばいい。もっと何か知りたいという方たちは、彼と「ダダ」を分かち合った高橋新吉さんのお書きになったものを見ればいい。さらに辻潤のアル中や気違いぶりを垣間見たければ、三島寛さんの「辻潤」（昭和四十五年、金剛出版新社刊）を見ればいい。評伝みたいなものを覗きたければ、玉川しんめい君の「評伝辻潤」（昭和四十六年、三一書房刊）をのぞけばいい。彼の持つ思想を識りたければ、松尾邦之助さん編の「ニヒリス トー辻潤の思想と生涯」（昭和四十二年、オリオン出版社刊）や折原脩三さんの「辻潤論」（昭和四十五年、「小説と詩と評論」七九号、八〇号）を見ればいい。彼と萩原朔太郎との交友を知りたければ、伊藤信吉さんの「萩原朔太郎Ⅱ 虚無的に」を見ればいい。さらにもっと彼を識りたければ、「本の手帖」（昭和四十年、四四号、昭森社発行）が「辻潤の人と思想」を特集して

いるので、それを見ればいい。また彼について参考になるものとして、寺島珠雄さんのお書きになったものもあれば、岩崎呉夫さんの「炎の女」（昭和三十九年、七曜社刊）もある。

それなのに、わたしみたいな素姓のしれない半ちくな脳タリン男が、辻まことさんの「一体辻潤の人や作品を解説すること自体がかなりナンセンスだ」「そのことは少しでも辻潤の書いたものを読めば解ることだ」「そもそも辻潤の思想のコツは一切の解説的智性を転覆しているところなので、その文学的意図は読者の悟性をいかに切捨てさせてしまふかにある……といってもいいくらいなものだ」「辻潤は理解される必要のない人物だ」「辻潤を理解する」といえるほど、私は辻潤を軽蔑することができないのだ」（昭和四十五年、オリオン出版社刊、「辻潤著作集3」の「浮浪漫語」の解説から）という、強烈にいわれていることを十分に承知の上で、彼のほんの一部分について書きたくなったのは気まぐれというしかない。わたしは「辻潤」の実物を見たことがない。単なる**蟲貝衆**の一人である。二十年に近い渡り人夫稼業に見切りをつけて、上京したのは、労働のてきない体にしてしまったからでもあったが、東京に住みついた五つぐらいの理由の一つに、辻潤を読みたいという夢もあった。運よく、辻潤最員の総元締め松尾邦之助さんとめぐり逢い、彼のおもしろさについて講義してもらった。他に安藤更生さん、村松正俊さん、添田知道さん、戸田達雄さん、竹久不二彦さん、山本正一さん、辻まことさん、若松流二さんや多くの方たちとも出逢い、辻潤ひろめの雑用と

いう一役を担ったりして、「辻潤著作集」（全六巻、別冊年譜）を手弁当て編集させてもらったことも、なお辻潤鼯鼠になるきっかけとなったようである。著作集の編集がおわったとき、彼のことを一冊書いてみないかと勧めてくれたところもあったが、辻まことさんの「死んだ辻潤はどんな顔付き、どんな声だったかは読者当然の興味かも知れない。だが本当の興味は、汚染されない読者によって辻潤がどんな顔付きで、どんな声で、その読者のうちによみがえるか？」ということだとおもう」（「浮浪漫語」の解説から）という、こんな言葉を嚙みしめながら、わたしでは駄目ですとお断わりした。そのように、辻潤を書かないといっておきながら書いたのは、わたしから「辻潤」を追い出したいという魂胆もあったることだった。

辻潤とは

ある日の辻潤―東京都大田区馬込（昭和10年 52歳）



● 穴キスト辻潤の本はあんたに合うかどうかと、南陽堂がいった。

辻潤とは何か。

なぜ、何かといわなければならないのか。

——という、「何か」という問いが、ここ十年ばかりひよこひよこと拾^もげてくる。

こたえはまちまちである。

文士といった人もいる。

詩人といった人もいる。

思想家ではないかといった人もいる。

そればかりではない。あるいは英語屋、ユーモリスト、駄洒落スト、ニヒリスト、アナキストなどといった人もいる。

またダダイスト、アル中、浮浪者（ルンペン）、ふうてん、狂人、尺八吹き、異端者、精神破綻者というようなことをいった人もいる。

さらに天才といった人もいる。

へえ、さようか。辻潤とはそんな者であったのかとしても、何かという「問い」が消える

どころか、辻潤なる者がますます判らなくなってくる。

*

「虫が鳴いている——まさに秋だ。秋になると虫が鳴く——別段今更珍しいことでもない——子供の時分から幾度となく聴いているのだ。しかし、こうやって静かな真夜中にひとりで虫の啼いているのを聞いていると——まことにいい気持で、なんとなく生れて始めて虫の啼くのをきいているような気持がする」

というこんな（昭和五年十一月刊、万里閣書房刊「絶望の書」の「ものろぎや・そりてえる」の書き出し）ものからしたら、文士といえるだろう。

*

■ 汁

と言うものは食べたことがありませんが、多分、こんなものだと思います。

昔、希臘の子供達が、燕が初めて飛んで来る時に、町の中を戸毎に唄って歩いたと云う歌でもご紹介いたしましょうか？

おいで、おいで、燕さん

美しい春がやって来ましたね

燕ときれいなお天氣が一緒に来ます
燕さんの胸が白くって、あとはみんな
真っ黒け

僕等にお菓子を投げて下さい

あなたの家のおくらから

燕さんのためにご報謝

お酒はフラスコの中

チーズはバスケットの中

小麦のパンと烏麦のパン

燕さんが嬉しりますよ

さあ、あなた方が下さるか、僕等が

先へ行くか？

なぜ、そんなにグズグズしているの？

イヤならイヤでよござんす

この戸を外して持ってゆきますよ

そんなことはズイブンやさしい

家の中のおかみさんがチビだから。

さあ、サッサとお出しなさい

燕のために戸を開けろ

僕等は子供で

おじさんじゃないのだよ。

自作か、少し翻訳か混じっているのか判らないが、こんな詩（大正十二年六月、純正詩社刊「純正詩社雑誌」第二巻第二号に発表）からしたら、詩人ともいえるだろう。

*

「一切の信仰は一切の言論と同様に自由であるべきだ。狐や狸を拝む人間が未だに存在しているのは不思議でもない。

人間の歴史は人間痴呆の記録だといった人間がいる。

現在は過去一切の蒐積だ。現在も亦刹那に過去になりつつある。凡ゆる新旧の問題は先ず

其処から出発しなければならぬ。

如なる時代も常に過渡期だ」

というアフォリズムにかかったもの（昭和十年八月、書物展望社刊「癡人の獨語」の「ぺるめる DROPS」より抜粋）からしたら、ダダとも思想家ともいえるだろう。

*

何であるかは一まず置くとして、辻潤について思い出したことがある。

昭和十七年、初夏。

博多。

午后。

小雨が降っていた。丸善書店の書籍売り場にも、客の絶え間の一時があつて、コツコツと刻む時計の音がもの憂く、眠気をもよおしてくる。

「うち、微熱があるの」

高ちゃんが葉ちゃんと話していた。

「風邪引いたのでしょう」

「そうではないわ……」

売り場係の高ちゃんも葉ちゃんも、女学校を出ていたので、わたしよりも二つぐらい年上だった。ひそひそ話なので、あとは聞こえなかった。書棚のかげから二人のほうに顔を出したら、葉ちゃんがおいおいでというように手招きした。高ちゃんが手下げ袋から、一冊の本を出すところだった。見ると、表紙の取れかかったくたびれた本である。

「これ、おかあさんのものなの」

「むずかしそうね」

「そうでもなさそうよ。でもね、シンケンに読んだら擒とらにされるから、いけないといっていたわ」

高ちゃんと葉ちゃんとのひそひそ話には、「イトウノエ」「オウスギ」といった人たちのなまえも出てきたが、わたしには何のことやら判らなかった。

「おなごしか、見ていかん本ですか」

わたしはいらざることをいったが、その本にはおおっぴらにはできない「秘密」がありそうだった。

〈絶望の書 辻潤〉

「ゼツボウ」の「シヨ」、「ツジ」「ジュン」とやっとこさで読めたものの、「絶望」がどんなことなのか、「辻潤」が何者なのか識るよしもなかった。

わたしの受け持ちは売り場係と書籍のストック倉庫の整理係を兼ねていたので、勤務時間中でも、倉庫から裏口に出て、勝手に外へ抜け出すこともできた。忘れないうちにと考えたので、外へ抜け出して、丸善書店から少し離れたところにあった古本屋の南陽堂へ行ってみた。

「あの、教えてもらいたかことがあるとです」

「なんね」

南陽堂は古本屋を開くまで丸善書店に勤めていたとかで、そのせいもあってか、小僧のわたしに目をかけてくれていた。つまり本屋の大先輩であり、相談役でもあり、世間についての先生でもあった。

わたしは「ツジジュン」を口にした。

南陽堂の瘦せこけた目がキラリと光った。光ったように見えた。「ツシジュン」といっただけで、おおっぴらにできない「秘密」みたいなものに、強張るものを感じたのだろうか。

「待ってや」

といって、南陽堂は奥へ引き込んだ。本好きが高じて、古本屋をはじめたというだけに、彼はなかなかの蔵書家のようであった。古本の売り買いの商売なのに、奥に仕舞い込んだ本は売りがらなかった。いつだったか松の木の皮や番傘の渋紙の表紙の本や銅板の嵌った本

を見せてくれ、あるところには人間の皮で造った本もあるそうだよと教えてくれたが、冗談だろうと思った。

「あったよ」

奥から抱えてきた本の中から、三冊だけ勘定台の上に並べた。

「ツジ、ジュンですか」

「翻訳もあったはずだが、これしか見つからないよ」

南陽堂が見せてくれたのは、

〈癡人の獨語〉

〈才子以前〉

〈浮浪漫語〉

の三冊だった。わたしには何と読むのか、読めなかった。妙な題名だなと思う一方、一人の「ツジジュン」に、何冊もの本があるのが不思議でなかった。書店に勤めて三カ月になるというのに、一人の人間に一冊の本しかないと思ひ込んでいたからだろう。三冊の本を眺め、ドキンドキンとしながらも、「ツジジュン」の「秘密」が薄れて行くような気がしてきた。

「えらい字ばかりのごたる」